



一般
社団

日本盆栽作家協会会報

第 28 号

令和 2 年 10 月 1 日



盆栽は作家なくして作品なし 作品なくして芸術なし

盆栽は、十年手元に持つと、真に自分の「作品」となります。十年といわないまでも、最低でも五年は手元に持つて自分の「作品」として愛情をかけて欲しい。

それくらい心の余裕が無くては、楽しさがわいてこないし、心の眼も、真の審美眼も開けません。

そして、作家としての目的意識を持ち、個性的な作意と創意で作る。そこで初めて芸術たりうるものが誕生するのです。

日本盆栽作家協会は、盆栽界の発展のために真の盆栽の「作家」を育てていきたいと考えています。

企画展 第28回

作家展

〔日本盆栽作家協会〕

会期／前期 令和元年11月15日（金）～11月20日（水）

後期 令和元年11月22日（金）～11月27日（水）

会場／さいたま市大宮盆栽美術館

主催／一般社団法人日本盆栽作家協会

前期



五葉松 鉢：勝山袋式楕円 山田登美男（埼玉県）

五葉松の形態で、これほど清々しい風情を表した景色も珍しいと思います。特に根元の株立状の立ち上がり、その丹精な幹肌は格別です。鉢との調和にも工夫をこらしました。



ギャラリートーク（解説・山田理事長）



姫しゃら 鉢：白交趾楕円 須藤 雨伯（栃木県）

姫しゃらの優雅な「艶の美」が好きで、多くの盆栽を丹精してまいりました。しかし、現在はこの一鉢だけが生き残り生命を美しく輝かしております。幹肌の色気、幹の優美な立ち姿、繊細な枝の妙味、私はこの美しい姿に小堀遠州の「綺麗さび」を観ます。



五葉松

鉢：和丸

山崎 純一（富山県）

入手以来、約15年間育ててきました。はじめは人工的な曲が目に付きましたが、古さが出ると目立たなくなりました。今後は葉数を減らし、小さくまとめてゆきたいと思います。



五葉松 鉢：平成渡長方 今井 千春（神奈川県）

この五葉松は、立ち上がりのサバ幹に魅力を感じ、3年前程前に入手しました。上部の枝を抜き天ジンにすることで、樹高縮小と共に、より迫力のある姿になりました。まだ未完成ではありますが、今後も枝作りに専念し、樹格向上を目指したいと思います。

五葉松

鉢：南蛮丸

矢内 信幸（大阪府）

昭和初期に発表された古木で、その当時有名な小林作太郎氏が手がけた文人風な山採りの五葉松です。昭和・平成を代表する盆栽愛好家である高木禮二氏が愛蔵された一鉢でもあり、今日、改めて完成に近い姿での出展となります。





赤松 鉢：南蛮丸 米沢 増雄（東京都）

細幹の素材を生かして観賞できる盆栽は、多くの愛好者が望んでいるところですが、この樹はまさにそれを体現した作品といえます。今後の更なる培養を楽しもうと思います。



真柏 鉢：紫泥長方 菊岡 成泰（奈良県）

山採り品の真柏で、四国の石鎚山^{いしづちさん}の産出と思われます。非常に珍しく、私の所蔵する中でも特に貴重な一鉢です。



五葉松

鉢：中渡紫泥玉縁楕円

馬場 守一（群馬県）

樹勢維持に努めています。枝をコンパクトにまとめました。

五葉松

鉢：和外縁丸

野上 和義（富山県）

懸崖として仕立てられた五葉松を、10年ほど前に根上りの吹き流しとして改作した作品です。立ち上がりから幹の流れには風雪に耐え、しっかりと根付く自然樹の厳しさが感じられます。今回が初出展となります。父から受け継いだ盆栽と共に、私も盆栽作家として成長していきたいと思っています。





真柏（銘：令和の輝） 掛軸：「和」平櫛田中 書

アメリカの盆栽会やヨーロッパ盆栽会は盆栽は芸術とする論が圧倒的に優勢のようである。

アメリカは会則の目的に盆栽を芸術として規定している。ドイツでは盆栽を非常に古い日本の芸術として百科事典などに取り上げられている。

そこで私共の作家協会の意義として大切にしたいのは、盆栽は「芸術」のジャンルとして、盆栽作家達が名品作出に励むことで「園芸家」から「芸術家」となるのを応援し、社会的・文化的貢献をしていくことです。

また「芸術」という概念を通じて世界的なネットワークも形成したい。

更に芸術論的に盆栽を考察することによって盆栽の芸術的特性や他の芸術との異同優劣を究明することが出来るものと心を新たにしなければならぬと思います。

◆ 一般社団法人 日本盆栽作家協会 の意義

21世紀はアート時代といわれる



一般社団法人日本盆栽作家協会

理事長 山田登美男

2005年、秋の京都で開催された「世界アーティスト・サミット」において京都造形芸術大学副学長の千住博氏が基調講演され、「最近、料理やガーデニングが芸術の二大横綱といわれている。美しい庭や盆栽には作り手の心があり、感動を分かち合える。芸術は平和創造のプロセスである」と述べられました。

作家の川端康成氏も同様のことをノーベル文学賞のエッセー・ストックホルムでの授賞式において述べられております。

日本人の生活様式において日本庭園は大切なものですが、日本庭園の石組みや植物の配置を追求していくと盆栽につきあたります。

私は、盆栽とは自然と共生し、日本の四季を生活に取り込んだ精神文化の造形美であると考えています。

1993年に私が大変に親しくしていたいた（故）丸島秀夫先生（弁護士、日本盆栽学会副会長、他）が盆栽の芸術性について次のように述べています。

盆栽界では圧倒的に「盆栽は芸術なり」の論が多い。盆栽が芸術であるとして盆栽作りに日夜懸命に努力している人達が沢山いる。明治25年には東京で大規模な「美術盆栽大会」が開かれ「美術盆栽図」が刊行されている。

当時、盆栽が芸術であるからこそ「一般社団法人日本盆栽協会」は農林省でなく、文化庁に所属されているのです。

私共が青年の頃（30〜35才頃）は、会員10万人運動を目指した時代もあった。今日はどうでしょう？ 時代の変化に対応しきれないでいるようです。しかし反面、外国では平和な盆栽芸術は大変に人気となり歓迎されています。

山田登美男 — 盆栽、美の探求

令和2年（2020年）1月31日～3月1日 於）さいたま市大宮盆栽美術館



さいたま市大宮盆栽美術館の現代の著名な盆栽家を紹介するシリーズ第3回展として、当協会理事長の山田登美男氏を取り上げて頂きましたので、その模様の一部をご紹介します。

作家ごあいさつ

本展では、山田氏が盆栽家として盆栽の「美」を追い求め、日々盆栽と対峙する中で生まれてきた傑作盆栽の中から毎週異なる作品を5週間にわたり展示、また、山田氏が創始した「彩花盆栽」や盆栽家・山田登美男の盆栽づくりの意図や哲学、信念なども深く掘り

私が盆栽の道を志し、盆栽の制作を重ねては50数年の時が経ちました。その間、川端康成の「人を春にする」という言葉にも導かれ、今回はその成果として、梅と桜を中心に、松の盆栽などと調和した展示を試みます。

皆さまに、私の盆栽で表現する「新春の日本の美」を感じて頂けますと幸いです。

盆栽づくりの意図、哲学、信念

◆自然らしく、美しく

— 創作における、らしさの美学

盆栽は、一般的には、幹がよく見えるように枝を人為的に整えて仕立てられるのですが、山田氏が手がける盆栽では、いわゆる「忌み枝」として幹の前面にかかる不要な枝も、あえて残して創作されています。

「盆栽は、自然らしさがなきゃいかん」

山田氏がこう語るとおり、この完璧すぎない枝の表現が見所です。

◆古瓦に咲いた花 — 彩花盆栽の誕生

現在、清香園の代名詞ともいえる「彩花盆栽」は、山田と天平時代（729～749年）の古瓦との出会いから生まれました。盆栽修行を重ね、その道で生きていくことを決意した山田が、ある時ふと目にした古寺に落ちた一枚の瓦。よく見ると、どこから飛んできたのか、瓦にひっそりと咲く小さな草花の姿！。

その様子に感動した山田は、「盆栽は人の心に

◆盆栽の飾り — 美と調和

「最終的に、盆栽は座敷に飾って眺める芸術であるべき」

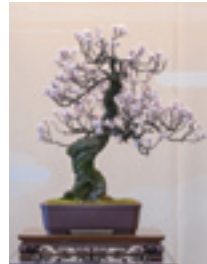
山田の盆栽の美学に関する強い信念は、高い格調を備えた盆栽の「飾り」への志向と、飾りにおける空間の美を追求した盆栽づくりにつながっています。

「盆栽美を深めるためには、陳列（飾り）を繰り返して繰り返しやっていかないと気がつかない」ということが「沢山ある」と山田氏が語ります。飾りには、脇に添える草花や

石、背景に合わせる書画に関する見識も必要ですが、それらと調和する空間を創り出す盆栽作りが最も重要といえます。全てが調和することによって、飾りの美的空間が生まれるのです。

生きた芸の道、盆栽道を伝えている山田の原動力は、盆栽の飾りを通じて、はじめて対峙することになる、盆栽の美に対するあくなき探究心にあります。

未完の芸術、終わりになき挑戦



【第3回 日本盆栽作風展】昭和33年（1978）

【第10回 日本盆栽作風展】昭和60年（1985）

作家プロフィール



山田 登美男

清香園 四代目園主
1938年生まれ。65年、清香園三代目のもとで盆栽修業に入る。日本盆栽作風展では外務大臣賞、内閣総理大臣賞等を多数受賞。83年、清香園四代目継承。91年、日本盆栽作家協会

を設立。ヨーロッパに同協会支部を設立し、イタリア、スペイン等で盆栽指導を行い、活躍の場を世界に広げている。同年三越新宿店にて「彩花盆栽」を発表。現代における盆栽愛好者層の拡充に大きく貢献している。

あゆみ

◆三代目・釜次郎と四代目・登美男

1965年、三代目・釜次郎のもとに山田が会社勤めから一念発起して弟子入り。83年、四代目継承。

◆作風展における盆栽展示

1976年、当時、盆栽の道に入ってから10年余であったが、「第1回 作風展」で入選を果たし励みになった。その後も入賞が続き、第10回展では「内閣総理大臣賞」を受賞。盆栽家としてのあゆみは作風展を介して着実なものとなった。（右写真）

◆日本盆栽作家協会の立ち上げ

1991年、日本の盆栽文化の発展と芸術性の追求・研鑽を図る研究会を立ち上げた。この研究会が「一般社団法人日本盆栽作家協会」設立へと発展した。

◆ヨーロッパへの盆栽指導

海外でも展覧会等の活動を広げ、その後「ヨーロッパ支部」の設立に至り、その指導にあっている。山田の盆栽飾りは、外国の愛好家にも大きな影響を与え、ヨーロッパで「KAZARI」の本も出版され、今や世界に広がっている。



ASPAC 2019 ベトナム大会

(第15回 アジア太平洋盆栽水石大会)



ベトナムで開催される第15回ASPAC 2019の大会に弟子の神くんと養田くんを連れホーチミンへ。ベトナムは4度目の訪問となるが来るたびに人々の持つ活気に驚かされる。ヘルメットにマスクをつけ2人乗りに3人が乗ったバイクが青信号と同時に街の中を走り抜けていく光景は蜂の大群が飛行するようだ。ベトナムの平均寿命を調べてみると国民の平均年齢は29歳、日本の平均年齢は49歳なので20歳の年齢差がある。ベトナムといえば「熱帯

のジャングル」イメージが強いが、インドネシアのPAIMAN MAK ASPAC名誉会長に招待されたのはなんと高層ビル30階建ての高級日本料理店。日本の六本木ヒルズ顔負けの圧倒的な夜景だった。ホーチミンは世界から不動産投資が加熱し、市の至る所で建設ラッシュが相次ぐ。

ASPAC 2019の会場はスオイティエンテマパークというデイズニールランドも唸るかのような広大な遊園地だ。会場のモニュメントは仏教と道教が南国



(当協会理事)
小林 国雄

の景色のなかで融合し壮大な世界観を醸し出している。盆栽と水石、鉢が千メートルのメインストリートに600点以上展示されている様子はもはやアジアトップクラスと言っても過言ではないだろう。世界各地の展示会を観てきたが展示の長さは世界一だ。

展示の内容は日本では観られない亜熱帯紀行の植物が珍しかった。小品盆栽は枝分かれが細かくまとめられてあり、大型の盆栽も古い幹の味わいに合わせ、線の動きが見事に表現できているものもあり将来性に期待がかかる。陳列からベトナム人のスケールの大きさと繊細さが同時に感じられた。

今後、展示会をする時は盆栽展示の間隔をもう少し広くとり、鉢や卓机の組合せをどう工夫すれば良くなるか考えればよりレベルが上がっていくだろう。

デモンストレーションは初日の開幕式後8カ国の参加者が同時に行った。私の盆栽デモンストレーション



は、大音量のクラシック音楽を背景に素材の樹齢35年、樹高1メートルの台湾真柏を電動チェーンソーを使い彫刻をするパフォーマンスを見せた。デモンストレーションの目的は盆栽を作る楽しさを多くの人に知ってもらうこと。特に大会役員のデインさんが見事な司会をしながらベトナムビールの差入れをしてくれたおかげで私のジョークに磨きがかかった。会場は学びあり、笑いありの楽しい雰囲気だった。

自分なりのものの見方考え方

小林 国雄

新型コロナウイルスの感染拡大で、世界中が甚大な被害を受けている。盆栽界に於いてもあらゆるイベントが中止となっている。毎年秋季に京都の都メッセで開催される「日本盆栽大観展」が今年で40回目の節目なのに中止となった。また12月に開催される第46回の「日本盆栽作風展」も中止となった事は本当に残念である。

今の私があるのは、32年前に「日本盆栽作風展」で私が一位の盆栽で内閣総理大臣賞を受賞した事が、私にとって大きな自信と励みになり、精進した結果である。

私案ではあるが「大観展」の場合は、愛好家の皆様の健康と安全を考慮して、中止も仕方がないと思えますが人の少ない上野グリー

ンクラブで開催される「作風展」は業者のイベントであり、コロナウイルスの対策を思案し盆栽作家の作品の審査会だけでも行い、記録と若い世代の作家を育てる事が「作風展」の本来の目的ではないだろうか。

人間は切磋琢磨しあい成長するものである、オリンピックやワールドカップ、高校野球なども人を育てる為に必要不可欠なものである、オリンピックの創始者であるクーベルタン男爵がオリンピックは勝ち負けよりも参加する事に意義があると述べている。これは参加するアスリート達や観戦する多くの人々に感動を与えるからである。

だが、来年のオリンピックは開催されるのだろうか？ 多くの若者達の夢や目標を奪い

たくないものである。新型コロナウイルスのパンデミックを受けて、私達はどのような時代に突入したのか？ 日本の哲学者、梅原猛先生は「人間は普段は、自己の実存から眼をそらしている。しかし、それではない。もう一度人間は自己の真実の姿を直視しなくてはならない。」今回のような天災の不安が、人間が本来あるところの自己を自覚する時代の流れでは？

こんな時代だからこそ、サツキや盆栽の魅力と対峙する事を私はお薦めしたい。日本文化論の第一人者として知られる栗田勇先生は「盆栽発見」の著書の中で盆栽は「超芸術」と述べている。これは盆栽が植物ではじめから生命がある事と、完成までの時間が長い事である。栗田先生は「私は数年前、突然、盆栽の生命に触れた。盆栽

は、生々として深い世界を私の暮らしの中に開いてくれた。日々盆栽と暮らすことは、自分の人生と向かいあって改めて確かめながら過ごすのに似ている。」とこう述べている。

今回の天災は人の生命だけでなく、経済や教育危機にまで及んでいる。ピンチをチャンスと気持ちを切り替え、自粛を機会に盆栽の耽美に没りふける事もいいのでは。まさに晴耕雨読を手本にするべきでは。



作家展主旨

本協会が主催する作家展は、生きた伝承芸術、盆栽作家の精神高揚と高度な盆栽美を作出することにあります。

盆栽作家は人間性の豊かな感性を磨き、自然愛を基本とした芸術作品に表現されることで、最も大切であり、お互いを研鑽し合い、盆栽文化の一層の発展を切望するものであります。

しかし、盆栽作家をめざす条件は大変に厳しく、自然との調和を図り、永い修練の中から体得し、その積み重ねから美の心を包み合せる作業であります。今日の作家群が明日の社会にクリエイティブなボンサイ・アートとして、環境保全等に貢献できることを期待いたします。

第28回作家展 後期

ギャラリートーク
(解説・山田理事長)

《ニコニコ美術館》で、盆栽展を生中継！



※ ニコニコ生放送は、ダウンゴが提供する niconico のライブストリーミングサービスです。

2020年3月20日、コロナ禍で日本中で多数のイベントが中止に追い込まれる中、新しい試みとしてインターネット配信による、『春の花もの盆栽展』（さいたま市大宮盆栽美術館）の生中継が実現しました。

結果は大好評！ 多数の視聴数を得たことで、ネット配信という新しい媒体の有用性が示され、今まで盆栽展に足を運んだことの無い層にも盆栽の良さを伝えることができました。

当日は、橋本麻里氏《ニコニコ美術館》を司会に、石田留美子氏（大宮盆栽美術館 学芸員）、そして大宮盆栽美術館の盆栽管理官であり、当協会の理事長でもある山田登美男が解説者として出演し、お花見ができない分、大宮盆栽美術館の盆栽で日本の春を満喫しました。



会員募集のご案内

弊会は、昨年より新たに法人として活動を開始し、盆栽の芸術的、社会的、国際的評価の向上及び盆栽作家の養成に、より一層力を尽くしてまいり所存でございます。

そしてこの機会に広く門出を開いて新たな会員を募集することとなりました。

当会の活動趣旨に賛同頂き、盆栽作家を目指したいという方々のご参加を是非お待ちしております。

一般社団法人日本盆栽作家協会

一般社団法人日本盆栽作家協会 規約（抜粋）

（入会）入会にあたっては、推薦人1名が必要。

（会員たる資格の取得）入会金10万円。

（会費）会員の会費は以下に掲げるとおりとする。

（1）正会員 年10,000円

（2）賛助会員 会費は徴収しない

（3）名誉会員 会費は徴収しない

（費用負担）正会員及び賛助会員は、本会が主催する作品発表会、展示会等に作品を出品する場合には、その管理料、運営費等として金10,000円を納めるものとする。

※ 入会申し込み先は、巻末下欄の当協会の連絡先です。



赤松 鉢：和木瓜 山口 理津子（東京都）

厳しい環境で長い年月を経たであろう、野趣が見所の赤松です。型にとらわれない樹形で、山ずれの味わいを表現できていると感じます。大自然の木々から学ぶ事の多い盆栽ですが、この樹から何か感じて頂けたら幸いです。



真柏（銘：雲龍） 鉢：紫泥外縁長方 小林 國雄（東京都）

水吸い^{みずす}の躍動感と捻転するシャリ幹に魅せられ、15年前から手がけています。東北真柏^{はしろう}の葉性^{はしろう}だったものを、5年前に衣替えし、太すぎた水吸いを徐々に細め、樹格向上に努めました。



さんしゅゆ
山茱萸

鉢：和長方

風間 雄一（千葉県）

中国、朝鮮半島原産のミズキ科の落葉高木です。長年の手入れにより小枝はほぐれ、雄大な景色を連想させてくれます。鉢持ち込みの非常に古い一樹です。

杜松

鉢：山秋太鼓胴丸

秋山 実（山梨県）

杜松はジン・シャリの先端が鋭く真っ直ぐに尖り、真柏とは違う趣があります。捻転も少なく、樹形も真っ直ぐに伸び、その性質がよく現れています。杜松らしい真っ直ぐな幹と厳しい環境で樹芯が枯れてもなお耐えて育ち続ける樹形を表しました。右の枝を切除し、左の枝のみを使い、さらに厳しい情景を作りあげました。





真柏 鉢：古渡雷文下方 福舘 治（東京都）

岩手県の三陸海岸で山採りされた真柏です。国風盆栽展に出品された後、糸魚川真柏への衣替えがされています。自生地環境により作り出されたジンとシャリが見所です。さらなる樹格向上を目指して、精進して参ります。



皐月（大盃） 鉢：和鉢 陳 怡（Chen Yi）（上海市）

年月の経過を物語る太幹には日本の盆栽を引き継いでこられた先人の苦勞がつまっているように思います。私も中国の一作家として、盆栽のみならず、盆栽を作る「人」を育てられるよう精進して参りたいと思います。

五葉松

鉢：行山楕円

阿部 健一（福島県）

実生から 30 年手がけ、1988 年の春に鉢上げし、秋に最初の整形をして双幹の姿を作りました。その後、幹を調整し芯を切り、枝を立ち上げ、現在の樹冠部となりました。幹の流れを強調する為、前と左脇の枝を外し、裏枝も奥行が出るように整えました。上部に風を感じるような作りとしています。



杜松

鉢：和長方

吹田 勇雄（宮城県）

文人盆栽としての素材の良さに一目惚れし、さらに改作を試みました。「文人に始まり文人に終わる」との言葉を残された、故中郡英夫先生の教えを胸に、少ない枝の中でも右中間部の枝をジンにし、上部の屈曲した頭部の幹を生かして枝の長短を整えて作りました。



